

2023 AC

The 2<sup>nd</sup> Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.11 30日(夜)

# 1. 前回の補填

● 人に「ふさわしい助け手を造ろう」と言われた主は、人を深い眠りに落として、あばら骨を取り、一人の女に造り上げました。「女」と「造り上げる」という二つの語彙は預言的・奥義的です。女は生物学的な女だけでなく、「イスラエルの残りの者」と「エックレーシア」(教会)も含んでいます。女を「造った、形造った、創造した」ではなく、なぜ「造り上げる」(バーナー:𐤁𐤏𐤍)という語彙が使われたのでしょうか。それは、女を「死と復活」を通して「建て上げる、再建する」という必然性があったからです。これは神の予知と計画に基づくことでした。

● 「バーナー」(𐤁𐤏𐤍)という語彙の中に、「御子」を意味する「ベーン」(𐤁𐤏)があります。また「悟る」を意味する動詞「ビーン」(𐤁𐤏𐤍𐤎𐤎𐤍𐤏𐤍𐤏𐤍𐤏𐤍)、  
「悟り」を意味する名詞「ビーナー」(𐤁𐤏𐤍𐤎𐤎𐤍𐤏𐤍𐤏𐤍𐤏𐤍𐤏𐤍)が隠されています。それは、神の民が御子イエシュアの語ることば、すなわち「霊であり、いのち」であることばを悟ることによって、「造り上げられ、建て上げられる」ことを啓示しています。

## 2. 23節のテキスト ①

【新改訳2017】創世記2章23節

人は言った。

「これこそ(אִשָּׁה)、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。  
これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」

● 23節で初めて登場する語彙は、以下の4つです。

- (1) 「これ」 ・ ・ 「ゾート」 (אִשָּׁה) ・ ・ 「女」の指示代名詞
- (2) 「ついに」 ・ 「パアム」 (הַיּוֹם) ・ ・ 「今や」「再度・二度目」
- (3) 「骨」 ・ ・ ・ 「エツエム」 (עֲצָמַי) ・ 「本質・自身」
- (4) 「男」 ・ ・ ・ 「イーシュ」 (אִישׁ) ・ 「夫・アダム(固有)」

## 2. 23節のテキスト ②

【新改訳2017】創世記2章23節

人は言った。

「これこそ(אִשָּׁה)、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。  
これを(אִשָּׁה)女と名づけよう(אִשָּׁהの受動)。  
(אִשָּׁה)男から取られたのだから。」

●23節は、「人」(ハーマーダーム:אָדָם)が聖書で初めて語ったことばです。「これを女と名づけよう」は、「ふさわしい助け手についに(今度こそ)出会った」という特別な喜びが表されています。さらに、ここには「女と名づけよう」と言った理由が「男から取られたのだから」とあります。これはどういう意味なのでしょう。

### 3. 「女」と名づけた理由 ①

(1)これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉

ミブサーリー ウーヴァーサール メーアツァーマイ エツェム ハツパアム ゾート  
יָאֵת הַפֶּעַם עֲצָם מֵעֲצָמַי וּבָשָׂר מִבָּשָׂרִי  
私の肉からの 肉 私の骨からの 骨 ついに(冠詞付) これは(הַפֶּעַםの女性形)

● 「ついに」と訳された「ハツパアム」(הַפֶּעַם)は、以前は「今や」と訳していました。新共同訳、聖書協会共同訳はこれを訳していません。これは預言的に重要な語彙です。神のいのちは最後のアダムとなられたイエシュアのうちにあります(ヨハネ14:6)。そのいのちが流れ出て分かち与えられるには、一粒の麦が地に落ちて死ななければなりません。つまり、イエシュアの「死と復活」によって、再度(パアム:הַפֶּעַם)、神のいのちが流れ出る必要性を啓示しています。ここに「パアム」の奥義があります。

### 3. 「女」と名づけた理由 ②

●ヤコブが伯父ラバンのところに行ったとき、ラバンはヤコブに「あなたは本当に私の**骨肉**だ」と言いました(創29:14)。親子・兄弟・親族、および同族は「**骨肉**」と言われます(Ⅱサム5:1、Ⅰ歴11:1)。しかし夫婦の場合は「**骨からの骨、肉からの肉**」です。親子や兄弟・親族・同族以上に深い関係であることを意味しています。この表現は聖書でこの箇所(創2:23)のみです。

#### (2) 男から取られたのだから

●「女」は「霊」を意味する「男」の「あばら骨」によって造り上げられました。人はこの親密な関係を「イーシュ」(עֵשֶׂת)と「イッシャー」(אִישׁ)で言い表しました。この二つの語彙をよく観察すると、不思議な関係が見えてきます。

### 3. 「女」と名づけた理由 ③



שִׁינִי & הַשֵּׁנִי

●ここで質問です。二つの語彙の中に、相手にあって自分には無い文字といえは何でしょうか。

●男(イーシュ)の場合は「ヘー」(ה)、女(イツシャー)の場合は「ヨッド」(י)です。男と女が一体となるところに「ヤー」(הַי)が存在します。この「ヤー」は神聖四文字(יהוה)を省略したもので、固有名詞の「主」を意味します。つまり、男(イーシュ)と女(イツシャー)の間に、主である「ヤー」(הַי)がおられることで「純化された火、熱意をもった火」(エーシュ:שִׁינִי)となり、一切の不純物を含むことのなにかかわりとなることを意味しています。

### 3. 「女」と名づけた理由 ④

## עִשָּׂו & אִשָּׂרָה

●もし「イーシュ」と「イツシャー」から「ヤー」(אִשָּׂרָה)が抜け落ちるとすれば、どうなってしまおうでしょうか。それは単なる「エーシュ」(עִשָּׂו)となり、それはお互いを焼き尽くす「火」となることを物語っています。なぜなら「火」は、神のさばきを意味するからです。これが、ヘブル語の「イーシュ」(עִשָּׂו)と「イツシャー」(אִשָּׂרָה)に隠されている奥義です。

●残念ながら、日本語訳の「男」と「女」という語彙から、この秘密を知ることはできません。





## 4. 24節のテキスト ①

【新改訳2017】 創世記2章24節

それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、  
ふたりは一体となるのである。

● 24節で初めて登場する語彙は、以下の四つです。

- (1) 「父」 . . . . 「アーヴ」 (אָב)
- (2) 「母」 . . . . 「エーム」 (אִמָּ)
- (3) 「離れる」 . . . 「アーザヴ」 (אַזָּב)
- (4) 「結ぶ」 . . . . 「ダーヴァク」 (דָּבַק)

## 4. 24節のテキスト ②

バイシュトー      ヴェダーヴァク      ヴェエツトイツモー      エツトアーヴィーヴ      ヤアザーヴィーシュ      アルケーン

עַל־כֵּן      יַעֲזֹב־אִישׁ      אֶת־אָבִיו      וְאֶת־אִמּוֹ      וְדָבַק      בְּאִשְׁתּוֹ

彼の妻によって      そして結ばれる      ~と彼の母を      彼の父を      男は 投げ捨てる 離れる      それゆえ

エハード      レヴァーサール      ヴェハーユー      [עֶזְב] ]

וְהָיוּ      לְבָשָׂר      אֶחָד

ひとつの      からだに      彼らはなる  
「一体となる」

●冒頭には、当然の結果を意味する「それゆえ」(アル・ケーン:עַל־כֵּן)があります。副詞の「ケーン」(כֵּן)は、1章では「すると、そのようになった」(ヴァイエヒー・ケーン:וַיְהִי־כֵן)というフレーズで、神が語ったことばの通りになったという意味で、6回(7, 9, 11, 15, 24, 30節)使われています。2~3章ではこの24節のみですが、とても重要なフレーズです。

## 5. 「結ばれて一体となる」 ①

●ここで注目すべきは、「人」(ハーアーダーム: **רֹאשׁוֹן**)が「**男**」(**יֵשׁוּ: יָשָׁר**)となっていることです。この「**男**」は「女」「妻」に対応する語彙として「**夫**」(3:6, 16)とも呼ばれ、固有名詞の「**アダム**」(**רֹאשׁוֹן**)とも呼ばれます(3:17, 21)。ただし、4章1節では「人」(ハーアーダーム: **רֹאשׁוֹן**)が「妻」に対応し、「イーシュ」は「**男子**」を意味しています。

●また、ノアはその世代の中で「イーシュ・ツアディーク・ターミーム」(**完全に正しい人**)と記されています。ノアはイエシュアの予表です。さらに詩篇1篇の「幸いなのは**その人**」(アシレー・ハーイーシュ: **יְשָׁרִים יְשָׁרִים**)もイエシュアを証ししています。これらに重層的な「**イーシュ**」が見られます。

## 5. 「結ばれて一体となる」 ②

●24節の「それゆえ、男は・・その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」にある「**結ばれ**」「**一体となる**」ことは、神の本性に基づいています。それは御父と御子と御霊の交わりに見られるものであり、神の「栄光」(=永遠の重い事柄の現れ)そのものです。しかもその栄光は神だけで完結するものではなく、神と人、キリストと教会、男と女(夫と妻)、親と子、主人としもべの関係・・といった、あらゆるかかわりにおいて現される普遍的な事柄なのです。

●「神の栄光が現される」とは、神と人とが結ばれて一体となる実体を意味します。「都には神の栄光があった」(黙示21:11)とあるように、これこそが**神の天地創造の究極の目的**なのです。

## 5. 「結ばれて一体となる」 ③

● 18節の「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう」という神の思いは、24節の「ふたりは一体となる」ことで実現します。24節は単なる結婚についての教えではなく、福音そのものの奥義です。ここでは三つのこと、「結ばれる」「一体となる」そのために「父と母を離れる」ことを取り上げます。

### (1) 結ばれる

● 「結ばれる」と訳された「ダーヴァク」(אֲדָוָק)は旧約で54回使われています。その意味をグルーピングしてみると、以下の意味が浮かび上がってきます。

## 5. 「結ばれて一体となる」 ④

- ① 結びつく、縁を結ぶ    ② すぎる、堅くすぎる    ③ まといつく  
④ くっついて離れない    ⑤ 心が惹かれる    ⑥ そばにいる、そばから離れない  
⑦ へばりつく、打ち伏す    ⑧ 追いつく、追い迫る、追跡する、押し迫る  
⑨ (罪がへばりついて、その結果) 罪を犯し続ける    ⑩ 堅く守る

● 結論として、「ダーヴァク」(אֲדָוָק)は「神と人」、「人と人」のかかわりがきわめて親密であることを意味する動詞だと分かります。なかでも、異邦人のルツがユダヤ人のナオミに「すぎり」ついたことがどんなにすばらしい結果をもたらしたことでしょう。ここに、「接ぎ木の思想」が表されています。「神が結び合わせたものを、人が引き離してはならない」のです(マタイ19:6)。

## 5. 「結ばれて一体となる」 ⑤

### (2) 一体となる

- 24節を、使徒パウロは奥義だと述べています。

【新改訳2017】エペソ人への手紙5章30～32節

30 私たちはキリストのからだの部分だからです。31 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」

32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。

- 「一体」は「バーサール・エハード」(בָּרָא וְהָאָדָם)です。「バーサール」(からだ)の語源である動詞「バーサル」(בָּרָא)には「良い知らせを伝える」という意味があり(イザ40:9)、特にイザヤ書では、「バーサル」が「良い知らせを伝える」という意味で多く使われています。

## 5. 「結ばれて一体となる」⑥

● **一体となる**ことは、神の本来の深遠なみこころが秘められています。この奥義は偉大なのです。それゆえに「福音」となるのです。「一体」の「一」は「エハード」(אחד)です。

● 「わたしたちが**一つ**であるように、彼らも**一つ**になるためです」(ヨハネ17:22)というイエシュアの祈りのことばの中に、またパウロの「新しい**一人**の人」(エペソ2:15)ということばの中に、そのことが言い表されています。そのためには「父と母」を離れる(アザヴ:אֶזְבֵּב)ことが不可欠なのです。



## 6. 「父と母を離れる」①

### (3) 父と母を離れる

●ここに初めて登場する「父と母」とは何でしょうか。2章で登場する男と女は赤子で生まれたのではなく、最初から大人として存在しています。では、なぜ彼らに「父と母」がいるのでしょうか。実はここにも預言的な意味が隠されているのです。「男と女」が「キリストと教会」を表す奥義であることを、パウロが述べています。とすれば、男の「父と母」にも奥義が隠されていると考えるのは当然です。イエシュアもパウロも、実はこのことを経験したのです。「父と母を離れる」という戦いを経なければ、キリストと教会が一体となることは決してないのです。

## 6. 「父と母を離れる」②

●十戒の第五戒に「あなたの父と母を敬え」(出エジプト20:12)とあります。そこでは字義通りの「父と母」です。しかし創世記2章24節の「父と母」はたとえです。「離れる」と訳された「アーザヴ」(אַזַּב)は「離れる、見捨てる」を意味する強いことばです。もしこのように教えなければ大変なことになります。

●実はここでの「父と母」とは、「ストイケイア」としてのユダヤ教のことなのです。神殿、律法主義を中心とする宗教そのものです。創世記2章ではすでにこのことが隠され、警告されていて、イエシュアやパウロが登場した時にはじめて、明らかにされるのです。隠されたものは必ず、神の活動の舞台である歴史の中で現されてくるのです。

## 6. 「父と母を離れる」③

●そのことを理解するために、初代教会の最初の殉教者となったステパノに目を向けたいと思います。彼は「恵みと力に満ち、人々の間で大いなる不思議としるしを行っていた。・ ・彼が語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかった」とあるように、聖霊に満たされた使徒並みの人物でした。その彼がユダヤの最高議会に訴えられたのです。

【新改訳2017】使徒の働き6章11～14節

- 11 そこで、彼らはある人たちをそそのかして、「私たちは、彼がモーセと神を冒瀆することばを語るのを聞いた」と言わせた。12 また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、ステパノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。
- 13 そして偽りの証人たちを立てて言わせた。「この人は、この聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめません。
- 14 『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」

## 6. 「父と母を離れる」④

● 訴えの要点は、ステパノのみならず、ナザレのイエシュアも「聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめない」ということです。「聖なる所」とは**神殿**(**男性名詞**「ヘーハール」הֵיכָל)のことで、**律法**(**女性名詞**「トーラー」תּוֹרָה)とともに、ユダヤ教においては最も聖なる事柄です。それらに対して逆らっているという訴えです。まさにこの**二つのくびき**こそが「**父と母**」なのです。イエシュアの歩みも初代教会の弟子たちも、この「父と母を離れる」ことによって始まったと言えます。これはまさにそうなるように、神がご計画されたことだったとも言えます。

● イエシュアやステパノがなぜ殺されたのでしょうか。それは、ユダヤ教というストイケイアの根幹に触れたからです。イエシュアの使徒たち、そして使徒パウロも同様です。敵は彼らが育ったユダヤ教という宗教そのものでした。

## 今回のまとめ

● 今回の箇所を読むと、男と女の結婚の教えが記されているように見えます。しかしキリストを知ったパウロは、このことばの奥に隠されたさらに深い驚くべき教えを「悟った」(ἔγνω)のです。つまり、24節の「男は・・妻と結ばれ、ふたりは一体となる」ということばの中に、「キリストと教会が一体となる」という偉大な奥義が隠されていることを、パウロは啓示されたのです(エペソ5:30~32)。

● いつの時代においても、「キリストと教会が一体となる」ためには「父と母を離れる」ことが不可欠です。この意味を私は長い間理解することができませんでした。このことを、次節の25節で詳しく学びたいと思います。